連　載

震災レポート①

株式会社ジェー・シー・アイ　渡部　達也

1．はじめに

2011年3月11日14時46分、巨大な揺れは突如として襲ってきた。

現在（平成23年10月）は、震災から約半年が経過しているが、被災地では、その傷は深く残っており、未だ復旧の途上という状況にある。

私は、被災地で活動する福祉機器販売事業者として行ってきたこと、感じたことをこのレポートを機会に振り返ってみたいと思う。

2．地震発生　3月11日

3月11日の午後、私は営業車で、仙台駅前の大通りを次の予定場所へ向け移動中で、信号待ちをしていました。その時、携帯電話のハンズフリーのイヤホンから、聞きなれない音が鳴りました。携帯の画面を見ると、「緊急地震速報」と表示され、「どきっ」としたその直後に、凄まじい地鳴りと共に始まった揺れは、どんどんその大きさを増していきました。私が危険を感じて車から飛び降りると、周囲のビルから窓ガラスや壁材が地面へ容赦なく降ってきました。周囲の車は全てその場に停車しており、歩道にいた人達を安全な車道へと誘導し、一緒に揺れがおさまるのを祈っていました。これほど恐ろしいと感じたのは人生の中で無かったかもしれません。それほどの恐怖を感じました。

長い長い揺れでした。ようやく落ち着き、宮城野区扇町にある仙台支店の安否が気になり向かいました。ですが、さっきまで当たり前のように走行していた道路には、亀裂が走り、継ぎ目の段差、うねりが発生していました。信号は消え、幹線道路への侵入が困難になっていました。滅多に聞かないラジオを入れると、「大津波が来る」と何度も聞こえた記憶があります。

仙台支店に到着すると、社員が支店前の歩道に集合していました。皆呆然として、余震の恐怖に怯えていました。工場の派遣社員に帰宅の指示を出し、被害の確認を行いました。その時、事態が極めて深刻であることを理解しました。幸い社員は皆無事でした。その後、自宅や近所の両親が心配になり、帰宅を考えましたが、携帯電話はすでに回線が混乱し、安否確認も出来ませんでした。帰宅途中に降り始めた雪の中、道路では私と同じ様に帰宅を急ぐ人々と、信号停止、亀裂、段差により行く手を阻まれ、いつもは30分で帰宅できる道のりを5時間かけて帰宅し、妻と両親の無事を確認しました。すでに家の中は闇に覆われていたましたが、ロウソクに明かりをともし、今からやるべき事を考えました。その時はとにかく情報が欲しかった。この地震がどれほどの被害をもたらしているのか。情報が必要な被災地は、それを入手する術を停電により奪われていました。先行きが見えなく、余震が頻発する中で眠れない夜を過ごしました。とてつもなく長い夜でした。

3．使命感と行動　3月12日～

これほど朝の光のありがたさを感じた事は無かっただろう。光は人間を前向きにしてくれる。生きようと思わせてくれるのだ。

依然として携帯電話での連絡は取れない状況だったが、翌日黒川郡大和町の当社本部に行くと、すでに沢山の社員が荒れ果てた社内の片づけを行っていた。思いを同じにする仲間がいる事を、大変心強く感じました。自分に出来ることを、出来る限りやっていこう。そう思いました。

その当日から、社内に震災対策本部を立ち上げま

株式会社ジェー・シー・アイ　本部・工場
〒981-3494　宮城県黒川郡大和町松坂平2-5-2

した。得意先に限らず高齢者施設・病院では、不足しているものが沢山あることは明らかでした。幸いにも当社の東北・北海道の各支店には比較的大きな自社倉庫がありました。翌日から各営業担当者は、物流課のトラックに紙おむつ・手指消毒剤等の消耗品や、断水が続いていたため、高齢者の身体衛生に必要な体拭き、ドライシャンプー等を可能な限り詰め込み、状況・安否確認を行いながら、顧客先を訪問しました。停電の為受注システムは機能しないので、手書きのメモで物品の納品を行いました。そうして訪問した高齢者施設では、状況はもっと逼迫していました。入所者の生活に必要な食料や飲み水、暖をとるための重油、明るさを確保するための電気等、沢山の問題が山積していました。必要な物品を聞き取り、そのまま夜の震災対策本部会議において担当者同士で情報の共有を図り、行動予定を決めました。

次の問題は、ガソリンでした。それが手に入らないと物品の納品どころか、出社すら出来なくなります。電気が回復した途端、ガソリンスタンドにはこれまでに見たことが無い長蛇の列が出来、給油は困難になりました。この打開案として、給油部隊を編成することにより効率的に対応できました。

誰もが初めての経験。山積する問題に対してどこから手を付けていいのか分からなかったが、仲間たちの知恵と強い気持ちで何とか乗り越えることが出来たように思います。

４．震災の中での絆　３月24日

震災後の逼迫した備品不足が少し落ち着き始めた3月24日、社会福祉法人愛泉会の愛泉荘より、車いすが足りないという相談を受けて、津波により被災した、同法人の仙台市若林区荒浜の特別養護老人ホーム潮音荘（以下、潮音荘）へ行く事になりました。しかし、行く道路には瓦礫の山や、施設エレベーターは使えないと思い、また一人では何かあった時の心配もありました。そこで日頃より高齢者施設の適合支援で一緒に活動している東北福祉大学の関川伸哉准教授に相談したところ、二つ返事で同行の了承を頂きました。本当に心強かった。そして荒浜へ車を走らせるにつれ、津波が奪ったものの甚大さを目の当たりにしました。震災前、いつも通っていた町の面影は無く、あったはずの商店や家屋は破壊され、流されていました（写真1）。潮音荘へ着くと、あまりにも変わり果てた建物の姿に二人、言葉が出なかった（写真2）。施設の中に入ると、あまりの惨状に全身の力が抜けた。廊下には防風林であっただろう大木が積み重なり、天井まで破壊されていた二階へ上がると、マットレスがホールの床に敷き詰めてあり、テーブルにはガスコンロと保存水の容器がたくさんあった。どれだけ恐ろしい思いをしたのだろう。どれだけ必死に入所者を守ったのだろう。それを思うと、涙が止まらなくなった。

写真１　震災前は住宅が立ち並んでいた道路脇

写真２　津波により被災した特別養護老人ホーム潮音荘と、ケアハウス松涛館

次に潮音荘の避難先である愛泉荘へ向かった。事前に車には、メンテナンスを施せば使用できる車いすや、歩行器、浸水を間逃れた備品を詰め込んでいました。到着すると、潮音荘の職員の姿を見つけました。あの津波の中、体を張って必死に戦った英雄達です。積荷を降ろして、英雄たちと抱き合って互いの無事を喜びました。感動した。不思議なくらいに明日を生きる力をもらった気がした。

５．衝撃を与えた余震　４月７日

４月７日の深夜、自宅で大きな揺れを感じ、電気が消えました。震度６強の余震でした。この余震による精神的ショックは大きかった。絶望を与えるのに、これ以上のタイミングはないのではないか。今まで積み上げたものを、一度に失ったかと思えました。しかし、今回は初めての経験ではありませんでした。一度通った道です。皆の経験値は、著しく上がっていました。この余震を乗り越えることが出来たのも、互いを思いやり、同じ痛みを共有出来る仲間がいたから。これからも、この仲間たちと最後まで頑張って行きたいと強く思いました。

６．仕事が出来ることの喜び

地震から半年が過ぎた頃、ある養護老人ホームの相談員より、男性入所者の車いすの相談を受け、アセスメントの後、デモ機を用意して車いすの適合を行っていました。男性は身長が 171cm と比較的高く、スリムなのだががっしりとした方でした。最初は言葉少なだったのだが、打ち解けていくにつれ色々なお話を聞かせて頂きました。若い頃は本格的なバンドマンで、宮城県内のライブハウス各地で活動を行っていた話。40 代後半で脳卒中を発症しがっかりしたという話。「若い頃はさぞかし女性に人気があったでしょうね」と言うと、満更でもなさそうな表情をしたり、非常に楽しい仕事をさせて頂きました。車いすも自走していただいたが、大変こぎやすいと「グー!」と言って、親指を立てて喜び、気に入って頂いた。「この車いすは調整式の車体ですので、これきりでは無く、車いすを通して生涯のお付き合いをしましょうね。」と笑顔で別れました。

その後、相談員に話を聞いて衝撃を受けました。「あの入所者は、震災時、津波の被害にあった特別養護老人ホームに入所しており、入所者も施設職員も約半数が亡くなってしまったそうです。その後こちらの養護老人ホームに入所することとなり、被災した施設の職員に付き添われて来たのだが、施設職員も本人もその時、涙が止まらなかったのです。本人も最近ようやく明るさを取り戻しつつあるのですが、今日車いすを操作している時が、今までの中で一番、明るく楽しそうにしてらっしゃいました。」

その話を聞いて、あの方も震災で心に深い傷を負った事を知ると同時に、自分の仕事に喜びを感じると同時に誇りを持つことが出来ました。現在行っている適合支援を通して、微力ながら人を元気付ける事が出来る。私にとっては、これ以上なく嬉しい出来事でした。そして、その男性入所者の笑顔から逆に元気をもらった気がします。

７．かけがえのないもの

この震災で今まで初めて気づいた事が多くあります。まずは、水と食べ物のありがたさ。当たり前の様に飲み食いしていた物の有難さを痛感しました。今では、食事前に自然と手を合わせるようになりました。電気とガソリンもそうです。それ以上に有難いと知ったのは、仲間の存在です。一人では乗り切ることは出来なかっただろう。様々なものに自分は生かされているのだと教えられました。

高齢者施設、病院の職員、当社社員の中にも自分の家族や親戚の安否確認も出来ないまま不眠・不休で頑張っている人達が多くいましたし、そして、繰り返す余震の中、先行きが全く分からず疲労のピークに達していたと思います。彼らは、自らの生活を顧みることなく職務を遂行していました。そして思う。震災からずっと体を張って支えてくれていた人達がいてくれたからこそ今があるのだと。

８．稿を終えるにあたって

この度の東日本大震災により被災された皆様、ならびにそのご家族の皆様に心よりお見舞いを申し上げます。心の痛みや傷は決して浅くは無いと思います。長い道のりになるかと思いますが、共に苦しんだ事で築かれた絆は強く硬い。これから、真の復興を遂げるまで、私も被災者の一人として共に歩んで行きたいと思います。

そして、皆様の暖かい御支援無しには業務が遂行出来ない事がたくさんありました。特に潮音荘訪問の時以外にも、被災施設へ納品する為の荷積みや、納品に毎日の様に進んで手を貸して下さった、東北福祉大学の関川伸哉准教授。そして、私達の為に物的、人的支援をして下さった全ての方々に、心より感謝申し上げます。有難う御座いました。